

「消化器の分泌と吸収の生理」 Gastrointestinal Physiology—the essentials

T. J. Sernka, E. D. Jacobson 著
森 治 樹 訳

京都府立医科大学教授
川 井 啓 市

森治樹教授の翻訳による Thomas J. Sernka, Ph. D. と Eugene D. Jacobson, M. D. による「Gastrointestinal Physiology」を書評を書くために一読させていただいた。その結果は甚だよいチャンスを与えていただいたものと感謝している。

私にも 10 年前のことになるが、「消化器疾患の機能と病態」についてアメリカのクリーブランド・クリニックの Dr. Dworken の翻訳を教室の村上講師と分担させていただいたことを思い出す。大半は村上講師

の分担となったが、このとき翻訳が容易でないことを身にしみて感じたものである。その理由は両国における疾病の差や、両国での教育の差、研究のための発想の差によるものであろう。しかし、この点に関して序文を書いておられる高久教授の指摘のように、これが翻訳かと思われるほど滑らかな文章にまず驚かされた。このように理解しやすい翻訳は、単に森教授の海外留学の長さによるのみではなく、先生自身著者を良く知っていて、その内容を的確に

把握していただけることによるものであろう。

常々、私は日本における研究発表のなかで、ややもすれば生化学的ないし病態生化学的方面からのアプローチに比重がかかり過ぎているのではないかと感じていた。もちろんこのことは、生化学的な情報が華かに進歩しているのに対し、生理学的研究手技は、やや軽視されているとまでは言わなくとも、少し遅れている感がないとは言えない。その意味で生理学、病態生理学ならびに病態生化学との両輪のバランスのとれた研究を期待し、かつこのことに対して 1 つの解答を与えてくれたように思われる。「消化器の分泌と吸収の生理」を幅広い視野から取り上げられていることは、これから研究に入る若い研究者のみでなく、卒後教育の一端としてはなほ重要な意義をもつものと考え、是非御一読を推薦する次第である。

A 5 判 200 頁 図 37 1989

定価 4,120 円(税込) 円 300

医学書院 刊